

CEHSOC

Citizen & Community Empowerment in Health and Social Care

News Letter No.4 RITS

2008年2月15日発行

プロジェクト

CONTENTS

- ごあいさつ「3年目のおわりに：焦点となる患者・住民エンパワメント」…………… 1P
- えっせい「男性介護者の語りから学ぶ－「介護者モデル」の変容の狭間で」…………… 2P
- えっせい「医療におけるコミュニティ・オブ・プラクティスという試み」…………… 4P
- プロジェクトイベント報告…………… 5P
- プロジェクト訪問記－第3回がん患者大集会－…………… 7P
- プロジェクトの研究業績…………… 8P
- プロジェクトイベント情報…………… 11P

ごあいさつ「3年目のおわりに：焦点となる患者・住民エンパワメント」

CEHSOCプロジェクト代表 松田 亮三
(立命館大学産業社会学部 教授)

医療・福祉における患者・住民エンパワメントに関する課題を検討するプロジェクトを開始して早くも3年が経とうとしています。この3年間の間に、日本の医療は大きな変化を経験してきました。法制度的には、財政・供給の両面に渡って医療のあり方に構造的な変化を今後医療にもたらしていく可能性のある医療保険改革法が2006年に成立しました。また、介護保険についても大規模な改正がなされるとともに、障害者行政の分野でも障害者自立支援法が制定されるなど、医療・福祉分野全般の大きな改革が行われてきました。一方で、医療へのアクセスの問題を端的に示す事件が相次いで生じ、がん対策基本法などにみられるような患者側からの新しい取り組みも行われました。さらには、勤務医の労働

条件や医療に関する不確実性・事故・過誤をどのように扱っていくのかについて、より具体的な議論がなされるようになってきています。

潜在的な論点も含めて、これらの議論は次のようなことがらをめぐっています。国民経済の中での医療・福祉分野への配分のあり方、医療・福祉の中での効率性、医療・福祉サービスにおける公平、医療・福祉サービスの質、医療の安全性・リスク・不確実性への対応方策、病気や「要介護状態」への社会的対応、です。多くの公共政策の問題がそうであるように、これらについての合意は困難であり、また総合的に何を重視し、どういう手順で政策を実施していくか、ということについて合意するのは、さらに困難です。そして、残念ながら、現在の日本ではこれらに関する課題が山積み

とってよい状況です。

このような大きな変動の渦中にある医療・福祉の中で、本プロジェクトは微力ではありますが、研究という角度からいくつかの貢献をしてきました。本稿執筆時点（2008年1月）ではまだ、少し早すぎるのですが、これまでの成果を簡単に振り返ってみましょう。

まず、私の方で患者・住民エンパワメントを、単純に医療機関や医療従事者が努力するという問題ではなく、制度・組織・臨床それぞれのレベルで追求されるべき課題として考える枠組みを提案しました。一方で、健康格差にどのように対応していくかを考える際の枠組みを内外の研究をもとに検討するとともに、国のレベルの政策はともかくとして日本の医療・福祉を都道府県単位で構築するための力量形成と協力体制が課題となっていることを指摘しました。また、棟居ポスト・ドクトラルフェローは、健康権理論をふまえてがん対策について具体的な制度的課題を明らかにしました。さらに、男性介護者を切り口として介護者（ケアラー）に焦点を当てる必要性を、日本生活協同組合連合会医療部会との共同調査によって明らかにした津止教授らの研究はメディアにおいても注目を浴びました。患者・住民と切り結ぶ場面の問題としては、小川教授はケア・マネージャーの目を通して、地域社会の中で不可視化されている高齢者に焦点を当て、より立ち入った援助のあり方の検討の必要性を

示しました。また、松島客員研究員らによって、出産に際して男性・女性両者を含めた総合的な援助の必要性とそのための手法の検討がすすめられてきました。最後に、秋葉准教授によって、生協組織において組合員参加の実態を分析して検討する試みが行われてきています。これらの詳細は、個別の成果として出された論文を是非ご覧下さい。

このように振り返ってきますと、ほとんど取り組めなかった重要な課題があります。それは、本プロジェクトの名称にある「地域（コミュニティ）」としてのエンパワメントについての具体的検討です。この10年間は医療だけでなく日本の行政全体に関わる改革がなされ、その一つが地方分権・地方自治に関わる問題でした。そして、今日の日本の医療・福祉は、おそらく分権や自治ということと同時に、全国の地理的な格差や資源の偏在をどうするか、そしてその偏在のある中で、地域で暮らす人々や組織が何をどのように取り組むのかを抜きにして、その解決は展望できません。限られた体制で行っているプロジェクトではありますが、代表者として申し訳なく思っています。

冒頭に述べましたように、本プロジェクトが掲げた課題は今まさに争点となってきています。プロジェクトは2008年度末をもっていったん区切りをつけますが、この課題についての研究と実践の協力・共同が引き続き発展していくことを願っております。

えっせい「男性介護者の語りから学ぶ－「介護者モデル」の変容の狭間で」

男性介護に関わるエンパワメント・プログラムの開発研究グループ代表 津止 正敏
(立命館大学産業社会学部 教授)

介護するのは嫁や妻、娘というこれまでの「介護者モデル」が地殻変動をおこしています。いまや介護者の4人に1人は「妻を介護する夫」や「親を介護する息子」という男性。都市部では既に3割を超えともいわれていますが、その介護実態は最近ようやく人々の知るところになってきました。

私は、この間、日本生活協同組合連合会医療部会と提携し、妻を介護する夫や親を介護する息子という男性の介護実態調査に取り組んできました。その成果は昨年9月に『男性介護者白書—家族介護者支援への提言—』（津止・斎藤共著、かもがわ出版）としてまとめてきました。介護（者）調査が珍しい時代ではありませんが、「男性」に着目した初めての全国規模での調査になったことから、マスコミにも好意的に取り上げて頂きました。その調査結果の詳細は『白書』に譲るとして、以下その概要を、紹介します。

(1) 回答頂いた295人の男性介護者の圧倒的部分は「老老介護」。93歳を筆頭に介護者の平均年齢は69.3歳、被介護者は103歳を最高齢に、平均が79.1歳でした。(2) また、男性介護者は、夫172人58.3%、息子109人36.9%、と二つのグループに分類されますが、夫には「老老介護」、息子には「仕事・家計」という二つの高いハードルが立ちはだかっています。晩婚化・非婚化の影響か、親子二人暮らし世帯も55人と2割弱もあったのが特徴です。(3) そして、男性にとって介護への備えがない生活スキルの中で、突然に介護の役回りがくるということです。入浴・排泄・清拭等の「介護」も大変ですが、炊事・洗濯・買物・掃除といった「家事」にも不慣れな男性介護者の実態がありました。同居人がいれ

ば生活援助のヘルパー派遣が「否定」されるという介護保険制度の欠陥もあります。介護者支援、家族支援という介護政策の課題といえましょう。「コーヒー一杯入れたこともなかったのにいま家事一切をやっている」という妻を介護する70代男性の声に、男性介護者たちの介護実態が凝縮されています。男たちが視野の外に放置してきた家庭や地域での無償労働の存在に気付く瞬間でもあります。

かつて介護役割を引き受けるか否かは選択可能だといわれた男性介護者の特徴は、もはや過去の話になろうとしています。誰もがいや応なく介護者になる時代です。女性介護者と比較してどのような特徴が解析されたか、という質問もよくきかれますが、私は、「介護に備えなき」男性の介護問題としてコメントしています。男女の比較対照というより、男性に着目することによって、家族や女性によって不可視化されてきたわが国の介護問題の構造をよりクリアに把握できるのではないか、といつも前置きしながら、ですが。

私事になりますが、航空会社の介護帰省パスを取得してもう2年余りになります。老人保健施設で暮らす84歳になる母の介護見舞いのためです。全介助の自由にならない身体と認知症の状態でおも、母は50を過ぎた息子の夕食が心配らしく「ご飯がなくなる。早く家に帰れ」と言います。親子関係は続いています。「たはむれに 母を背負いて そのあまり軽きに泣きて 三步歩まず」…啄木の歌に追いかけてながら、いつも感傷的になってはまた京都に帰っています。悩みつつ迷いつつ日本の多くの息子や娘が通ってきた道を私もまた歩いています。

えっせい「医療におけるコミュニティ・オブ・プラクティス(実践コミュニティ)という試み」

妊娠・出産に関わる当事者エンパワメントの研究グループ 小嶋理恵子
(宮崎大学医学部看護学科小児・母性看護学講座助手)

私は助産師として総合病院で数年間働いた後、立命館大学、そして立命館大学大学院社会学研究科と合計6年間の学生生活を送りました。修士取得後、縁あって、当時社会学部の教授だった中川順子先生が代表を務められていたプロジェクト研究に携わることになりました。その研究会を通して、このエンパワメントプロジェクトの代表研究者である松田先生と出会い、今日に至っています。人との出会いによって、自分の世界が広がり、それがまた人との出会いを生むという喜びを実感しています。

今年度、私はこのプロジェクトで5月と6月の定例研究会の企画をしました(<http://www.human.ritsumei.ac.jp/hsrc/team/team09/index.html> 参照)。この企画には、私自身の医療従事者としての体験と、父を看取ったときの患者家族として、患者や家族のニーズを医療従事者に伝えることの困難さの体験が大きく影響しています。看護師・助産師として臨床で働いていたときには、5月の定例研究会で紹介されていた、＜医師と患者・家族との板挟み＞、＜医療従事者間の意見の不一致＞、＜漠然とした「煮詰まり」感＞を感じるが多々ありました。この問題を医療従事者間で解決しようとする、どうしても感情論になってしまい、解決策を出す前にお互いが疲弊してしまいます。この研究会で紹介された、事例を「医学的適応」、「患者の意向」、「QOL(生きることの質)」、「周囲の状況」の4分割チェックシートを用いて検討する方法は、そ

それぞれの医療従事者がどこを重視しているのかを客観的に知ることもできます。その意味では、対象のニーズを把握するプロセスにおいて医療従事者間のコミュニケーションを円滑にするというツールでもあると感じました。

6月の研究会では、患者や家族の「暗黙知」を言語化することで形式知化し、そしてそれを集合知化するという手法を用いて、「学問としての患者主体の医療」(「Medicina Nova」)を体系化しようとしている医師、田中祐次先生をお招きしました。

私は、この田中先生の主催する「患者学セミナー」に参加しています。このセミナーは、患者さん、患者家族の方、医療従事者、メディア関係者で構成されており、医師および医療従事者－患者・患者家族間のコミュニケーションの溝を埋めるためのファシリテーター養成を目指しています。このセミナーでの体験を通して、この活動は、コミュニティ・オブ・プラクティス(実践コミュニティ)ではないかと思っています。実践コミュニティという概念は、ビジネスの中で注目されている手法です(Etienne Wenger, Richard McDermott, et al (2002) *Cultivating Communities of practice*, Harvard Business School Press, 野村恭彦監修(2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス－ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』, 翔泳社)。

本書の言葉を借りて患者学セミナーにおける実践コミュニティを説明するならば、「共通の専門スキルや、医療におけるコミュニケー

ションの溝を埋めるために、非公式に結びついた人々（医療従事者や患者経験者）の集まり」であるといえます（同書12 p）。イギリスやアメリカの先行研究を概観しても、疾患を限定せずに、病院を利用する人と、医療従事者や、建築家などが、それぞれの専門性を発揮しながら、新しい病院評価や病院づくりが行われてきています。

今、このエッセイを書きながら、あらため

て自分の研究を振り返ると、立命館大学での出会い、医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクトへの参加を通して、妊娠・出産期における当事者といった限定的な枠組みだけでなく、医療の当事者とは誰かという問題意識に変わってきたなと思います。今後は、このような視点から、医療における当事者エンパワメントをテーマに研究を続けていけたらと考えています。

プロジェクトイベント報告

今年度で開催された CEHSOC プロジェクトの主なイベントについてご報告します。

第9回 CEHSOC 定例研究会

2007年5月26日（於 立命館大学衣笠キャンパス 修学館2階 第2共同研究会室）

「臨床倫理コンサルテーションの役割と課題 ～医療現場の倫理問題を「個人の悩み」にしないために」

板井孝壺郎 氏
（宮崎大学医学部社会医学講座生命・医療倫理学分野 准教授）

2007年5月26日に第9回 CEHSOC 定例研究会が開催されました。報告者は、宮崎大学医学部社会医学講座生命・医療倫理学分野准教授の板井孝壺郎さんです。

<参加レポート>

医療の臨床現場では、人工呼吸器を抜管すべきかどうか、あるいは抗ガン剤治療を中止するかどうか、生まれてくる赤ちゃんの救命をどこまでするのかといった倫理的問題に遭遇することが多々あります。この倫理的問題に対して、米国では、1980年代から臨床倫理（Clinical ethics）に精通したスタッフの人材養成がなされています。



宮崎大学医学部社会医学講座 生命・医療倫理学分野 准教授の板井先生をお招きして、この倫理的問題について考える機会を持ちました。板井先生は、2002年9月から宮崎大学医学部で常設型倫理コンサルテーションルームを開

かれ、この倫理的問題に直面した医療従事者のサポートをされてきました。2005年5月からは宮崎の地域病院でも同様の取り組みをされています。

これまでに、約680件の相談があり、医療従事者が倫理コンサルテーションを依頼した理由をみると、臨床現場では、①治療方針についての迷い（倫理的・法的妥当性に対する不安）、②医師と患者・家族との板挟み、③患者・家族への対応に困った、④医療従事者間の意見の不一致、⑤漠然とした「煮詰まり」感があるということが明らかになっています。そして、倫理コンサルテーションを受けたことで、①診療方針に関する具体的アドバイスを得られた、②疑問点・問題点を整理できた、③(援助者自身が) あらたな「気づき」を得た、④「スッキリ感」が得られた、⑤同職種間の「煮詰まり」を打開できた、⑥感情的・心理的サポートが得られた、⑦「チーム」によるコンセンサス形成が得られた、⑧「医療・ケアの質」の向上に貢献できたなどの変化がみられてき

ているということでした。

研究会の後半では、グループ毎に、事例を臨床倫理についての4分割チェックシートを用いて検討しました。このチェックシートは、「医学的適応」、「患者の意向」、「QOL（生きることの質）」、「周囲の状況」のそれぞれについて、事例を討議するためのツールです。前半の講義で紹介された宮崎での変化、そして、後半のグループワークを体験することによって、「倫理問題を個人の悩みにしない」、というこの研究会のテーマの主旨が、参加者により実感できたと思います。

「複数の医師及び看護師等が連携して対応を決めていくことのできる体制の確立」、それをサポートする医療スタッフへの倫理的支援体制、いわゆる「倫理コンサルテーション」のシステム構築がなされた時、新しい医療のあり方が提示されるのではないのでしょうか。

(文責：宮崎大学医学部看護学科
小児・母性看護学講座 助手 小嶋理恵子)

第10回 CEHSOC 定例研究会

2007年6月23日（於 ぱるるプラザ京都4階 第1研修室）

「Medicina Nova –新しい医療を目指して–」

田中 祐次氏
(東京大学医科学研究所 客員助手)

2007年6月23日に第10回CEHSOC定例研究会が開催されました。報告者は、東京大学医科学研究所客員助手の田中祐次さんです。

<参加レポート>

患者や利用者の権利については、近年日本でも多くの議論がなされるようになり、地域の市民団体や病院内の患者会などの活動も広



がりを見せしています。今回の研究会では、「もも先生」の愛称で親しまれる田中氏を招き、患者会「ももの木」やご自身の活動の経緯を中心に、新しい医学「Medicina Nova」が目指すものについて報告していただきました。患者会「ももの木」の活動では、ただ集まって楽しくおしゃべりすることを何より大切にしています。

報告者自身も、患者さんとの何気ないおしゃべりや日常のかかわりが「Medicina Nova」を考えるきっかけになったということをエピソードを交えて話してくださいました。患者同士の何気ないおしゃべりの中にこそ、患者主体の医療を考える重要なテーマがいくつもある

けれど、それは記録されることはありません。報告者は、既存の「患者学」ではなく、「Medicina Nova」を学問として体系化しようと試みています。患者や家族のこれら「暗黙知」を言語化することで形式知化し、そしてそれを集合知化するという手法です。

暗黙知を言葉での表現に転換していく作業は実際にどのようなプロセスで行われるのか、また研究者の資質やスタンスも重要になってくると思われ、だれがどのようにその作業を行っていくのか、今後の学問としての「Medicina Nova」の展開にも関心を持ちました。

(文責：立命館大学大学院社会学研究科 研修生 清水誓子)

プロジェクト訪問記 – 第3回がん患者大集会 –

プロジェクトメンバーは、プロジェクトの調査研究のために学外の研究会やイベントに参加することがあります。今回は、2007年8月26日(日)に広島で開催された第3回がん患者大集会の参加レポートをご紹介します。

「第3回がん患者大集会に参加して」

清水 誓子
(立命館大学大学院社会学研究科 研修生)

2007年8月26日(日)に広島で行なわれた、がん患者大集会に参加しました。会場の広島国際会議場には、患者・体験者・家族を中心に、医療・福祉に携わる人びと、行政関係者、そしてボランティアなどを含め、総勢2000名の方が全国から集まりました。

この大集会は、「変えよう日本のがん医療、手をつなごう患者と家族たち」をメインテーマに、これまでに大阪(2005年)、東京(2006年)で開催されており、第3回目になる今回

の大集会では、「緩和ケア」と「心のケア」を主要課題として掲げました。

プログラムの前半では、患者・体験者・遺族など当事者の立場から経験と想いを伝える講演と、国立がんセンターの心のケア研究(サイコオンコロジー)や広島県の緩和ケア支援センターの取り組みが報告されました。

休憩時間には、自身も闘病生活の経験があるミュージシャンのあどRun太氏が歌と漫談で会場を沸かせ、参加者も笑いと拍手で参加

していました。

後半では、ジャーナリストで自身も患者である本田麻由美氏が、がん対策推進協議会委員として国の政策の動きについて報告した後、多彩なパネリストによるシンポジウムが行なわれました。

最後には出演者とボランティアスタッフ全員がステージに上がり、その中心で支援機構の理事長である俵萌子氏がアピール文を読み上げ、会場が一体となる感動的なフィナーレでした。共感と連帯がよりよいがん医療への改革のエネルギーである、という主催者の一番のねらいを感じました。

このような非常に大規模かつ関係各機関の協力の上に成り立つ集会の開催には、がん対策基本法の制定や、患者会の活動の広がりなど、近年のがんをめぐるさまざまな状況や流れが背景にあります。主催者であるNPO法人がん患者団体支援機構は全国のがん患者団体を

支援する組織であり、このイベントも全国の76団体が共催として名を連ねていました。

今回はテーマも出演者も会場の規模も非常に大きな集会であり、さまざまな立場に関わる多くの人々がともによりよい医療を目指していくという強い思いを感じることができました。一方で、出演者の何人かも指摘していたように、まだつながっていない・つながろうとしない・つなげれない人びとの声をどう拾っていくのかということも今後課題となるだろうと思いました。

また、制度、組織、当事者・市民の参加など、切り口によって論点が異なります。今後、CEHSOCで取り上げていく上では、まずこれらの整理が必要になると思います。そして、定例研究会などを通して、関西の患者会の方に日常的な活動の様子などを伺っていきたいと思います。

プロジェクトの研究業績

CEHSOCプロジェクトのこれまでの研究業績(2008年1月末現在)を紹介します。ぜひご参考ください。

■ 図書

著者名	書名	出版社	発行年月
篠崎 次男 小川 栄二 松島 京	『21世紀に語りつぐ社会保障運動』	あけび書房	2006年2月
津止 正敏 斎藤 真緒	『男性介護者白書 家族介護者支援への提言』	かもがわ出版	2007年9月

■ 雑誌論文

著者名	論文表題	雑誌名(巻)	発行年月	ページ
松島 京	「出産の医療化と『いいお産』 ～個別化される出産体験と身体の社会的統制」	立命館人間科学研究第11号	2006年3月	147～159頁
秋葉 武	「中間支援NPOのサービスの多元化 －企業者ネットワーキングを用いた分析－」	日本経営診断学会論集(6)	2006年10月	16頁
松田 亮三	「医療におけるコミュニティ・住民 エンパワメント： 実践課題分析のための枠組み」	立命館人間科学研究第14号	2007年3月	183～195頁
秋葉 武	「1960年代におけるNPOの生成 －市民活動の析出－(上)」	立命館産業社会論集43巻1号	2007年6月	23～34頁
松田 亮三	「保健・医療・福祉の総合的展開に向けて －2006年医療改革法後の制度的枠組みを踏まえて－」	月間自治フォーラム Vol.574	2007年7月	11～17頁
松田 亮三 近藤 克則	「健康格差と社会政策： 政策内容と政策過程」	保健医療科学56(2)	2007年8月	63～75頁
津止 正敏 斎藤 真緒	「男の介護学02」	論座2007.8	2007年8月	261～268頁
秋葉 武	「1960年代におけるNPOの生成 －市民活動の析出－(下)」	立命館産業社会論集43巻2号	2007年12月	45～60頁
津止 正敏	「うつろう家族 夫、息子 －増える男性介護」	月刊ケアマネジメント2007.12	2007年12月	1～5頁

■ 調査報告書等

報告書名	発行年月	備考
「要援助高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査報告書(第1次)」	2006年7月	A4版72頁
報告書別冊「要援助高齢者の援助拒否・社会的孤立・潜在化問題に関する調査自由回答」	2006年7月	
「男性介護者前項調査報告書」	2007年1月	A4版86頁
オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」 ヒューマンサービスリサーチ2 『医療・福祉における地域・住民エンパワメント－実践編－』	2007年2月	発行：立命館大学人間科学研究所
「生協の組合員組織と活動研究会 研究会報告書」通巻49号	2007年10月	発行：くらしと協同の研究所

■ 学会発表

発表者	発表題目	学会名	開催地	発行年月
松島 京 小嶋理恵子	「いいお産と当事者性－当事者の人間関係に働きかける援助モデル構築に向けて」	第31回日本保健医療社会学会	熊本学園大学	2005年5月
Ryozo Matsuda	'Changing Health Care Governance in Japan'	Third International Jerusalem Conference on Health Policy (oral presentation).	Jerusalem, Israel	December, 2006
松島 京 小嶋理恵子	「『周産期』における男性・父親支援の構築に向けて ～助産院で立会い出産した男性の体験から～(示説)」	第14回日本家族看護学会	青森県立保健大学	2007年9月1日

■ その他

(1) 新聞掲載

① 男性介護調査関係記事

- ・「男の介護『家事にも苦労』、孤独傾向も 立命大など調査」、朝日新聞2007年1月20日朝刊.
- ・「妻や親を介護する男性」、日本経済新聞2007年3月29日朝刊.
- ・「男たちの介護(上)」、朝日新聞2007年4月19日朝刊.

② 健康権関係記事

- ・「けんこうブーム考⑨『健康権』とは何か(上)」、信濃毎日新聞2007年8月5日朝刊.
- ・「けんこうブーム考⑩『健康権』とは何か(下)」、信濃毎日新聞2007年8月12日朝刊.

(2) 雑誌インタビュー

- ・津止正敏「インタビュー 男の出番」、COMCOM No.470 2007年10月号、3～7頁.

(3) オンラインデータ

- ・Matsuda, Ryozo. "Detailed planning for secure health care delivery", Health Policy Monitor, March 2007. Available at <http://www.hpm.org/survey/jp/a9/3>
- ・Matsuda, Ryozo. "Delivering appropriate care for the aged", Health Policy Monitor, March 2007. Available at <http://www.hpm.org/survey/jp/a9/2>
- ・Matsuda, Ryozo. "Midcourse review of "Health Japan 21"", Health Policy Monitor, April 2007. Available at <http://www.hpm.org/survey/jp/a9/1>

プロジェクトイベント情報

これから開催を予定しているイベントをご案内します。いずれも参加費は無料ですので、お誘い合わせの上、ぜひふるってご参加ください。

■ 国際シンポジウム

「健康、公平、人権：健康格差対策の根拠を探る」

日 時：2008年3月6日(木) 10:00～17:00

場 所：立命館大学衣笠キャンパス 恒心館730号

※事前申込要：お名前・御所属・ご連絡先を明記の上、EメールかFAXにてお申込み下さい（当日参加も可能です）

【お申込先】立命館大学生存学研究センター

FAX：075-465-8371 E-mail：ars-vive@st.ritsume.ac.jp（担当：曾我・佐山）

I：健康格差・正義・人権

司会：松田亮三（立命館大学）

報告者：Jennifer Prah Ruger（Yale University）

コメンテーター：後藤玲子（立命館大学）

II：先進諸国における健康格差対策

司会：棟居徳子（立命館大学）

報告者：松田亮三（立命館大学）

コメンテーター：高山一夫（京都橋大学）

III：健康・医療における格差：英国における議論と政策展開から 司会：山本 隆（立命館大学）

報告者：Adam Oliver（London School of Economics and Political Science）

コメンテーター：青木郁夫（阪南大学）（以上、敬称略）

【主催】立命館大学人間科学研究所

立命館大学グローバルCOEプログラム「生存学」創成拠点

立命館大学生存学研究センター

■ シンポジウム

「いまあらためて『介護の社会化』を考える －男性介護者研究から見てきた家族支援の方向性－」

日 時：2008年3月15日(土) 13:00～17:00

場 所：立命館大学衣笠キャンパス 創思館1Fカンファレンスルーム

1. 基調講演「超高齢社会における家族支援の課題」

樋口恵子氏（評論家・東京家政大学名誉教授）

2. パネルディスカッション「家族介護者支援の課題と展望」

【主催】立命館大学人間科学研究所 CEHSOC プロジェクト・男性介護研究会

2008年2月15日 発行

立命館大学人間科学研究所 CEHSOC プロジェクト
(医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト)

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学人間科学研究所
Tel: 075-465-8358 FAX: 075-466-3306
E-mail: cehsoc@st.ritsumei.ac.jp (担当: 棟居)
URL: <http://www.human.ritsumei.ac.jp/hsrc/team/team09/>

本プロジェクトは、日本生活協同組合連合会医療部会からの奨学寄附金と文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」の採択を受けて遂行されております。